

**令和２年度京都市文化財公開施設保存活用検討委員会（第１回）
議事録**

１ 日時

令和２年１０月１２日（月）午後４時～午後６時

２ 場所

無鄰庵母屋２階（京都市左京区南禅寺草川町３１番地）

３ 出席者

(１) 委員

石田委員（委員長），仲委員（副委員長），板谷委員，大島委員，玉城委員

(２) オブザーバー

京都府文化財保護課 吹田主査

京都市 松田文化財保存活用・施設整備アドバイザー

(３) 事務局

京都市文化財保護課：山口部長，伊藤課長，中村係長，堀係長，今江主任，西森主任，成瀬

４ 次第

(１) 開会

(２) 委員長及び副委員長の互選

(３) ＜議題１＞計画策定の進め方

(４) ＜議題２＞計画書（案）について

(５) ＜報告１＞建造物に係る耐震診断について

(６) 閉会

5 議事内容

(1) 開会

(2) 委員長及び副委員長の互選

事務局から京都市文化財公開施設保存活用検討委員会規則第2条第2項に則り、委員互選で委員長及び副委員長を定める旨を説明。委員互選により石田委員を委員長に、仲委員を副委員長にすることとなった。

(3) <議題1>計画策定の進め方

事務局から「<議題1>計画策定の進め方」について説明のうえ、承認を得た。

(4) <議題2>計画書（案）について

事務局から「<議題2>計画書（案）」について説明のうえ、現時点の案について承認を得た。

委員からの主な意見・質疑等は以下のとおり。（●：委員，○：京都市）

- 本質的価値の項目で、計画（案）の性格上、庭園が中心になると思うが、建物に関する事項がほぼ何も書いていないようにも感じられる。建物のディテールというよりは、建物そのものが庭園を觀賞するために十分配慮されているということや、別荘・迎賓館的な用途として交流の機能を果たしていたという、建物に関する言及があってもいいかと思った。庭の目線についても、川の音とか、植生とか、あるいは遠くを眺めて比叡山を眺められるとか、補足事項においてはシークエンスという書き方をされているが、虫の目、中くらいの目、鳥の目と目線をいろいろ変えられるということも大きな特徴かなと思うので、補足事項に書いている内容も、むしろ本質的価値に入ってくるのかと思う。そうした解釈が含まれるものがどこまで許されるのかという点はあると思うが。
- 建物に本質的価値がどのように関わってくるかは、基本的には建造物の修理が喫緊の課題かと思うので、これから先、皆で考えていかねばならないと思う。最終的には山県有朋が構築した庭園観に回帰することに本質的価値を見出して、建造物についても山県の時代の姿を守ることにするなら、それ以降に付け加えられた要素があるならば、それは取り除いていくということになる。どの時点に修理、復元してどの時点の姿を守るのかとなると、山県の時代の、築造されていく明治29～30年代の建物について考えるということでもいいのかなと考えている。
- あくまで事務局としてのイメージではあるが、基本的には山県有朋が目指したもの、築造したものについて尊重し、価値付けしていきたい。ただ、当然山県の時代に戻すことは理想ではあるが、一方で現代的な活用も昨今の要請である。例えば、空調設備、消火関係の設備、電気の入り方、トイレの使い勝手など、既に若干現代的なアレンジを加えてきている。
もう一方で深刻な問題点として、いわゆる数寄屋建築では、建物と庭を一体で見せるために開口部がとても広く設えられている。それが数寄屋建築の特徴であるが、そこが著しい構造的脆弱性となり、無鄰庵でも、柱は曲がり、戸との間に隙間ができていたり、壁の散り際が空いたりという部分が数多くある。
そうした中で、耐震工事を行うには、大きな改造をしなければならないのに対して、解放感は一本質的価値として一維持しなければならないという、ある意味両立できない事項もある。その辺りの本質的

価値と思われる事項と現代的利用とに、どのようにして落としどころをつけるのかが、我々事務局としても重要である。そのような価値と利用という部分について、忌憚なく御意見をいただければと考えている。

- 本質的価値の記述は、本計画における憲法のようなものであるから、全てそれに集約していくわけで、一番最後に見直すべきところなのかもしれない。
- まさに報告書は、章を経るごとに憲法と法律と条例のような構成になっている。一憲法ともいえる一本質的価値に基づき、細かい規定というのは、その後に自ずと決まってくるので、まさしくそうした御理解がありがたい。
- （母屋2階座敷に）つつかえ棒を入れたことも、建物の歴史の中で生じてきたものであり、そのようなことを行って維持されてきたという歴史もある。それを踏まえるという考え方もあると思う。庭についてもある種の変化もあって、その変化も抑えるという立場もあろうかと思う。山県の築庭の最初に立ち返るということを前提にするということであると、つつかえ棒を無条件で取ることを良しとする方向で考えるのかなと思ってしまうが、必ずしもそうではないのか。
- 我々が文化庁へ説明する際に、整合性、一貫性がなければならないという立場であるので、その辺りを御意見で示していただければ、例えばこの辺りは時間の変化を認めるが、やはり本質的価値で重要なこの部分は譲れない、などというある程度の微妙な変化があっても説明ができると思う。
- 本質的価値として挙げられている点は、概ねそれで良いと思うが、指定の説明文のところにあるように、「無鄰庵は、明治27、8年頃山県有朋の別邸として築造されたものである」という。別邸なので当然、住むところがあるので、建造物部分も重要な構成要素であることは明らかであるが、ただその別邸の建物には、管理人住居を含むのかということまでは書いていない。その点については本委員会でも検討しながら決定していくという流れになると思う。

また、指定理由には琵琶湖疏水のことは書かれていないが、だからといって琵琶湖疏水の水を使い続けるのか、といったところは考えなければならない。指定理由で書かれているのは、滝があって流れがあって沢飛びがあって池があってまた流れがあるということである。これは現在の庭園の構成を変えない、維持するということになる。

加えて、水面と芝生、これを守っていく。場所はといえば、どこまで芝生だったのかわからず、周辺環境が変わってきている。建物も造られた時の状態に復元するのかという話があったが、庭園にも同様のことがあり、気候が変動したり湿度が変わったり、それから光の条件が変わっており、植生を当時の姿に復元するという事はなかなか困難なところがある。そのところは検討を行いながら、芝生があったところが苔になったりとか、あるいは苔であったところが裸地になったりしているので、そうしたところは、1箇所ずつ場所をみながら、詰めていくことになるのかと思う。

さらに、樹林越しに借景を楽しむということなので、樹林と借景を維持していくことが必要である。ただその時に、どこまで比叡山を見せるのか。古写真どおり借景を再現するのか、あるいはそうしてしまうとほかの建物が見えてしまうので、それは良しとするのか。その辺りのところを具体的に議論していくのかと思う。最後にやはり「明治における優秀な庭園である」とあるので、明治時代らしさというものを、来園者にどう感じていただくかということが重要なことと思う。

- 庭園と建物を分けて考えることは宜しくないと思うが、今回の検討に当たっては、建物についてはメンテナンスや耐震性といった、活用に係るニーズを踏まえながら、本質的価値を守りつつ、どう手を

加えることができるのか、ということを考える。一方で庭園の方は、明治期の姿に戻していくためのメンテナンスというか管理方針をゾーン毎に分けて考えていく、という理解でよいのか。

- 正直に言うと明治期の姿に戻すといっても、限界がある。例えば庭園のヒノキの更新を行うという場合でも、既に何本かが更新の途中で枯れている。あるいはイロハモミジを新たに入れても、全然しっかりと育ってくれない状況にある。実際、既に元々壁面のようにになっていた外周の樹々を、1本ずつ分けるような手入れをしており、ある程度、幹や枝が明確となるような手入れを行ってきた。だが幹の肥大化は止められないので、それに関しては植え替え以外に手立てはない。しかし植え替えると、しばらくの間、敷地の外側が完全に見えてしまう。また更新のし易い箇所とし難い箇所がある。正直、植生を明治時代の頃の状態に戻すというのは、現実的にはなかなか難しい。例えば主屋南側のクスノキの東側に大きな立派なモミジがあったが枯れてしまい、新しいものに植え替えたが、それも元の大きさに戻るまでには、何十年も掛かる。木が伸びる時間、環境もあるので、現実はある程度の方向性に基づいて進めていく、というレベルでしか実行できない。
- 建物の場合は動かないものだから、ある程度イメージしやすいが、庭は生き物であり、気候条件も変わっており、本質的価値を言葉として示すのはいいものの、実際に管理を行っていく場合に、計画と現場でズレが生じないのかという気はする。
- 一種の理念として提示するにとどまる、ということなのかもしれない。

(5) <報告1>建造物に係る耐震診断について

事務局から「<報告1>建造物に係る耐震診断」について説明のうえ、了承を得た。

(6) 閉会

次回第2回委員会開催は令和3年2月～3月頃を予定していること及び耐震調査の結果について報告することを説明。